

第2回分科会活動報告

日時：2011年 6月17日（金）13時00分～17時30分

場所：共立女子大学 神田一ツ橋キャンパス 本館15階 1524AB会議室

出席者：52名

記録者：平石 泰介（東海大学）

1. 配付資料

- 1) 2011年度第2回第二分科会プログラム
- 2) 2011年度第二分科会出欠名簿
- 3) 2011年度第1回第五分科会開催について（ご案内）
- 4) 2011年度第2回第一分科会開催について（ご案内）
- 5) 富士通「大学事務セミナー」（ご案内）
- 6) 第3回情報戦略フォーラム（ご案内）
- 7) CS研第二分科会2011年度第2回分科会アンケート
- 8) 共立女子大学事例紹介資料
- 9) 共立女子大学・共立女子短期大学 OFFICIAL GUIDE 他 パンフレット2点
- 10) 東海大学事例紹介資料
- 11) 東海大学チャレンジセンター2010年度活動報告書他 パンフレット1点

2. 研究活動内容

1) 全体会 13時00分～13時20分

- (1) 開催校ご挨拶 共立女子大学 事務局 事務局長 遠山氏
- (2) 幹事会より連絡

- ①情報戦略フォーラムの案内
- ②第1回第五分科会開催の案内
- ③第2回第一分科会開催の案内
- ④第3回第二分科会、合同研修会の案内
- ⑤総会開催についての報告

2) 事例紹介「学生一人ひとりの就職能力向上を図る全学連携支援への取組み」

（事例：学内限定SNS「COHARU」） 13時20分～14時10分

共立女子大学 情報センター事務局 統括室長 田中氏、村居氏

平成16年度より共立女子大学の将来構想の中で、神田一ツ橋キャンパスへの都心回帰や全学部と短大を含めた改組再編を行い、教育ネットワークシステム「Kyonet」による事務情報のシステム化を行った。さらに、教育の質保証のために「共立力」という人材養成要素の見える化を図り、社会人基礎力の確保を図っている。

情報のデータベース化のために「K y o n e t」で個人情報や正課の成績、正課外の活動記録や就職活動記録を行う。学生の携帯電話登録率が約100%であることを受け、学生連絡などもこのシステムを通して行っているため、ポスター類以外の学内掲示を撤廃している。

教職協働の学生支援を実現させることを目的とし、社会人基礎力の向上を図るために、2011年1月より学内限定SNS「COHARU」の稼働を開始した。「COHARU」は学生、教職員、卒業生専用のSNSであり、実名を公開することで信頼できる情報交換の場として活用し、バーチャルでのコミュニケーションをリアルでのコミュニケーションを円滑にするためのツールとすることを狙いとしている。

コミュニケーションツールとしての役割以外に、非公開の日記を閲覧しながら出席率の監視と連動させ、早期退学リスク回避などの学生サポートツールとして活用するために、モニタリング対象学生の抽出にも利用している。また、コミュニティの乱立を防ぐためにカテゴリ分けと整理を行うとともにガイドラインを作成し、「COHARU隊」と呼ばれる学生有志によって、学生の自治とSNSの活発利用を促進させる取組みを行っている。

学生による学生のための学生支援ツールとして成熟させるとともに、在学生、教職員、卒業生による共立ネットワークの形成、仲間集めからイベントの企画や実施をサポートし、社会人基礎力の養成を実現させることが今後の展望であり、一般的なテンプレートを使用したNGワードの登録に加え、「やめたい、つまらない」というネガティブワードの登録も検討していることが紹介された。

3) 施設紹介と見学「神田一ツ橋キャンパス 本館内」 14時10分～14時50分

4) 事例紹介「東海大学チャレンジセンターの取組みについて」 15時00分～15時50分

東海大学チャレンジセンター推進室 高橋氏

2006年、学生による東海大学ブランドの確立や東海大学のスケールメリットを活かしきる学部横断型の教育改革、大学職員による大学改革を目的としてチャレンジセンターが発足した。各部門の専門知識に加え、リーダーシップを兼ね備えた人材の質を保証するとともに、大学が担う新たな役割を達成することが背景として挙げられる。即戦力として専門性を培った学生や、自ら課題を見つけ出し、チームで協力し合いながら解決できる力を身に付けた学生を育成することにより、社会のニーズに答えている。

2010年6月発表の経済産業省『大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力の認知向上実証に関する調査」』によると、学生は「語学力」や「業界に関する専門知識」が必要と自覚しているが、逆に企業は「主体性」や「粘り強さ」を求めており、社会のニーズと学生が課題と自覚している点に差異がみられる。このような社会的現状を踏まえ、多様で広範な人々と協働する能力として「集い力」、難しい課題に立ち向かうための「挑み力」、困難を乗り越え目標を実現する「成し遂げ力」の3つの力を定義し、リーダーシップスキルやマネジメントスキルの修得を実現している。

教職協働による教育を実践するために、職員は「プロジェクトコーディネーター」として活動全般の進行状況を把握し人的支援を行っている。チャレンジセンター以外の部署からも推挙された職員が専門業務以外でサポートしており、プロジェクト支援に必要なコミュニケーション

ンやリフレクション、広報などのスキルを身に付けるためにSD研修を受講している。また、チャレンジセンター内にSNSを設け、プロジェクト毎の情報共有を実現するとともに、プロジェクト毎の活動報告などを「広報コミュニティ」に掲載し、プレスリリースなどの材料としている。

クラブ・サークル活動とチャレンジセンタープロジェクトの違いを明確にするために、各プロジェクトは前年度の成果・反省点を踏まえ「何を、どのように学ぶのか」を年間計画書に記載し、振り返りシートで「学びのテーマ」を学んでいるかを自己チェックさせている。これにより個人とチームの課題およびその改善点を認識させ、活動の質向上に貢献する活動を促し、記載内容はプロジェクトコーディネーターがチェック、フォローしている。

東日本大震災で深刻な被害を受けた地域の支援を目的とした「3.11生活復興支援プロジェクト」の取組みを紹介するとともに、プロジェクトメンバーの招集や理論と活動との結びつきを強化するためのプログラム開発、活動の評価システム確立が今後の課題であることが紹介された。

5) 討議 (座長：清水 (中部大学) ・仲井 (千葉工業大学) 記録者：杉本 (東海大学))

16時00分～17時30分

テーマ：「学生支援を目的とした職員の取組みとは。職員間の連携、システムの活用」

◎アカデミックアドバイザーについて

- ・教員1人に対して15～20人程度の学生が割り当てられており、半期に一度、90分程度の時間を設け、成績や進路などについて個々に相談を行う。(東京工科大学)
- ・退学者減少を目指し、学生支援室で管理している学生記録を学部庶務課経由で教員に提供し、長期欠席者への電話・メール連絡や心身のケアを依頼している。長期欠席者は連絡が取れないことも多い。(関東学院大学)
- ・教員1人に対して15～20人程度の学生が割り当てられており、オフィスアワーを利用して学習の指導や面談を行う。3・4年生は、ゼミの担当教員が基本的にアドバイザーも兼任する。また、成績不振者に対しては、2期連続で改善が見られない場合には保護者も交えて3者面談を行う。(産業能率大学)
- ・25人程度の少人数制クラス担任制度を適用している。クラス担任はアカデミックアドバイザーも兼任する。クラス担任のための特別な研修などはない。クラス担任と学生の接点が少ないのが現状であるが、3年生になるとゼミがあるため、接点が増える。また、クラブ活動が盛んな大学なので、どちらかというコーチや監督として学生と接する機会が多い。(日本体育大学)

◎出欠管理と長期欠席者への対策について

- ・学生証(ICカード)による出席管理システムを採用しており、講義の開始時と終了時に出席を取っている。また、指導教員への欠席者情報の提供も行っている。学生も出席状況を確認できるため、講義間の教室移動の迅速化などの効果が表れつつある。(中部大学)
- ・教員は、講義が終わったら学生サポート室へ出席表を提出する。これにより、出席状況が集約される。また、学生が必修科目の講義を2回連続で休んだら、指導教員が連絡を取るという制度もある。(東洋学園大学)

- ・保護者に向けて学生の出欠状況をリアルタイムで提供するサービスの実施も段階的ではあるが、検討されている。（東海大学）
- ・不本意入学など目的を持たず、周囲に流されてなんとなく大学へ入学する学生も多い。そのような学生は入学後に大学へ来る意味を見失ってしまい、その結果、長期欠席に陥ってしまったりする。（関東学院大学）
- ・毎年、適性を考慮すると大学よりも専門学校へ進学すべきだったのでは、と感じる学生もいる。高校での進路指導も関係あるが、大学か専門学校か、それとも高卒で就職するか・・・といった幅広い進路選択がなされずに、安易に大学進学を選択することに問題があるのではないか。（芝浦工業大学）

◎学生カルテについて

- ・指導教員、クラス担任、教務課などに限定して利用している。対象は在学生のみ。卒業後に学生カルテからは抹消される。所見欄にメンタルケアの対応記録などを入力することが可能である。（千葉工業大学）

◎その他の取組みについて

- ・ワンストップ・サービスを目標とした学生総合相談コーナーを設置している。教務課、学生課、キャリアセンターの3部署による当番制で担当している。また、3部署合同の勉強会を実施することでサービスの向上を図っている。（中部大学）
- ・学生支援プログラムという、学生と一緒に食事するなど、講義とは関係ない場面でコミュニケーションを図る。ボランティアのような形式で行っている。（千葉工業大学）

◎まとめ

学生支援に関連した取組みは、システムの有無に関わらず、各大学において様々な形式で行われている。内容によっては、効果がなかなか明確に見えにくいものもあるが、工夫と改善の余地を探り、持続していくことが重要である。

また、自身の担当業務と自主的な学生支援の両立は労力面でも、勤務管理面でも困難であるという現状があるが、積極性を持ち、小さなことから一歩ずつ実践していくという心がけを忘れずにこれからの学生支援に取り組んでいければ良いと感じた。

以 上

